

〔関係機関からの情報提供〕

双葉農業普及所 説明資料

③-(5). 花きの栽培状況と来年度に向けた
技術対策

花きの栽培状況と来年度の対策

双葉農業普及所

1 トルコギキョウ

(1) 今年の主な作型における栽培状況等について

ア 半促成作型（2～3月定植→7月開花）

冬期間の気温は平年並みと低めに推移したものの3月から平年を数度上回る暖かさとなり、平年並み～早めの開花となりました。

全体的に十分なボリュームを確保できており、高品質な切り花となりました。

なお、7月頃開花の作型では、高温による一斉開花が見られました。

イ 季咲き作型（4～5月定植→8月開花）

生育初期において比較的暖かい気温であったため定植後の活着がスムーズに進み、順調な生育を示しました。6月以降は平年を5℃程度上回る気温が続き、平年並～早めの開花となりました。

降水量は少なく日照時間も長かったことから、チップバーンやブラスチングはあまり見られませんでした。

概ね十分な品質の切り花ではありましたが、一部ほ場ではボリューム不足の切り花が見られました。全体的に高温による一斉開花が発生し、収穫しきれないほ場も確認されました。

ウ 抑制作型（6月～定植→9月～開花）

定植期から高温が続き、平年+5℃程度の気温の中で生育したこともあり、平年より2～3週間程度早く開花し、彼岸前にはほぼ出荷終了という生産者がほとんどでした。

高温による早期一斉開花、短茎開花、花弁数減少、枝数不足、ボリューム不足が顕著であり、極めて厳しい作型でした。

エ 病害虫

今年は病気の発生はあまり見られませんでした。灰色かび病：少発生、斑点病：無発生、ウイルス病（えそ輪紋病）：一部ほ場で多発生。引き続き、定期的な予防散布に取り組みましょう。

近年課題となっている土壌病害（立枯病、褐色根腐病）についても、土壌消毒後のほ場では被害の程度は小さかった一方、未消毒ほ場や適切な消毒が行えなかったほ場では中発生や株が全滅する事例も見られています。

害虫は被害が多く、アブラムシ類、アザミウマ類、ヨトウムシ類（特にハスモンヨトウ）、コナジラミ類などまんべんなく被害が確認されました。定植時に粒剤を散布する、ほ場のこまめな確認による初発時期での殺虫剤使用など適切な防除を心がけましょう。

(2) 来年度の対策について

ア 土壌病害

トルコギキョウの主な土壌病害は、**立枯病**（糸状菌：*Fusarium oxysporum* / *Fusarium solani*）、**褐色根腐病**（糸状菌：*Subplenodomus drobnjacensis*）、**青かび根腐病**（糸状菌：*Penicillium* sp. / *Penicillium pinophilum*）、**青枯病**（細菌：*Ralstonia solanacearum*）、**根腐病**（糸状菌：*Pythium irregular* / *Pythium spinosum*）です。

それぞれ病徴は異なりますが、主に根の褐変、腐敗、地上部のしおれ、黄化、立ち枯れ、青枯れなどが発生します。

連作障害の一種でもあり、栽培年数が長くなるほど発生リスクが高まります。

発生リスクを下げるため、①**輪作を行う**（トルコギキョウ+ストックなど）、②**収穫残渣をすき込まない**（収穫後に根を引き抜く、茎葉をほ場外に持ち出すなど）、③**土壌消毒を行って病害の菌密度を下げる**ことが重要です。

土壌消毒については、土壌病害の発生程度や栽培年数に応じて、適切な方法を選択し、効果的に実施することが極めて重要です。

消毒方法の選択については、以下を参考にしてください。

土壌病害の発生が多くなってからの土壌消毒では被害を減らすことは難しいため、早めの土壌消毒（根が褐色などに汚れてきた段階）や無症状段階からの定期的な土壌消毒がおすすめです。

表 トルコギキョウの土壌消毒例

		土壌病害発生程度		
		無～少	中	多
消毒 時期	春	ダゾメット	クロピク	クロピク+てんろ石灰
	夏	還元消毒/ダゾメット	還元消毒/クロピク	クロピク+てんろ石灰
	秋	ダゾメット	クロピク	クロピク+てんろ石灰
	冬	—	クロピク	クロピク+てんろ石灰

※ダゾメット：ダゾメット粉粒剤（商品名：バスアミド微粒剤など）

カーバムナトリウム塩液剤（商品名：キルパー）も可

※還元消毒：米ぬか等の有機物を用いた太陽熱還元消毒（エタノール還元消毒含む）

※クロピク：クロルピクリンくん蒸剤（商品名：クロルピクリン錠剤、クロールピクリンなど）

※てんろ石灰：糸状菌による病害発生時にのみ使用（糸状菌は pH が高いと活性が低く、病害程度が抑えられます）

効果的かつ適切に土壌消毒をするためにはいくつもポイントがあります。また、クロピクなどを誤った方法で処理するとかえって病害による被害が増加する場合や人体へ極めて重大な影響をもたらす危険性もあります。

初めてトルコギキョウに土壌消毒を実施する際は、普及所までご相談ください。

イ 高温対策

前述のとおり、令和5年は7～9月頃が平年+5℃程度高温で経過する非常に暑い夏であり、今年のトルコギキョウ抑制作型では短茎開花などの品質低下が顕著であり、非常に苦しい年でした。

高温対策として、①30～50%程度の寒冷紗による遮光、②循環扇等による換気を図る必要があります。

しかし、近年の夏期高温は上記の対策のみでは解決できないほどの温度となっており、上記に加えて③ミスト冷却（ドライミスト以外では開花時期の対策不可）、④冷房（クーラー、ヒートポンプなど）が必要になってきています。

他作型との作業競合もあることから、当地域平坦部においては半促成作型や季咲き作型を中心の作付けとし、技術や施設に自信のある方は抑制作型に取り組んでみるのも良いかと考えます。

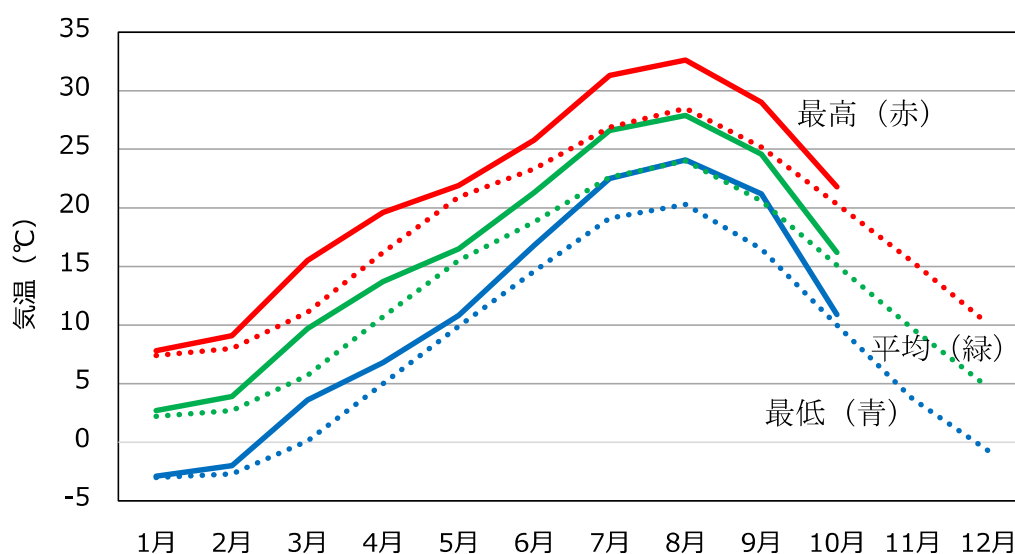


図 浪江町の気温（実線：令和5年、破線：過去30年間（1991～2020）平均）

2 ストック

(1) 今年の主な作型における栽培状況等について

ア 秋冬出し作型（7～8月播種→8～9月定植→10～12月開花）

播種期～定植期が非常に高温であったため、成苗率が悪く、また定植後の枯死も散見されました。

定植後もコナガやハイマダラノメイガが多発し、11～12月に出荷できる切り花は非常に少量となりました。

病気は比較的少なかったものの、一部ほ場では菌核病が多発しました。

イ 春出し作型（9～10月播種→10～11月定植→1～3月開花）

比較的温度が下がってきたことから育苗・活着に成功し、その後急に気温が下がったことも受け、順調に生育しています。

病虫害は全体的に目立っていません。

(2) 来年度の対策について

ア 高温対策

秋冬出し作型において、高温対策は必須です。

育苗～定植初期において、①30～50%程度の寒冷紗による遮光、②循環扇等による換気が重要です。

なお、育苗期間中に遮光が強すぎると苗が徒長してしまうため、③ミスト冷却等も組み合わせた高温対策に取り組みましょう。

イ 病虫害防除

近年、定植直後のストックでコナガやハイマダラノメイガによる被害が増加傾向にあります。

ほ場を良く確認し、発生初期での殺虫剤散布が重要です。

また、定植時に株元散布・全面土壌混和などできる粒剤も上手く活用することで害虫被害を抑え、高品質なストック生産につなげましょう。

農薬を使用する際は、ラベルを良く確認して使用しましょう！